

Title	Europe, A Geographical Survey of Europe, by J. F. Bogardus., New york, 1934.
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.161- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0162">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0162</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

變不易の矛盾對立を論ぜしめる。就中、我が神州は天地と共に開けて後世の建國ではない、即ち未だ曾て勃興なきが故に、滅亡といふ事斷じてあるべからず、されば寶祚は天壤と窮なく、無比の國體、威を以て奪ふべからず、力を以て争ふべからず、逆を以て立つべからずといつたやうな意味の木齋の論議は、倫理の根本を確立し、神道の本旨を闡明したもとして注目に價する。

最後に博士は谷秦山先生の事蹟をかりて、孝の道は一切の學問の最後の歸趨であると共に、一切の學問はこゝから出發する。唯その間險難の一路あるのみ。一生を費して、しかも容易に盡すべからずといつてをられるのである。

以上本書の内容の概略であるが、應用歴史の立場をとられてゐる(様に思はれる)平泉博士の説としては或は時流に投じたものであらうが、純粹歴史家よりしては容易に首肯し難い點があるだらう。たゞしかし萬物流轉に心動かされながら、しかも之を靜觀し、長柄の橋の鉤屑にも、勿來の關の「なこそ」の意義にも大いなる關心を持たれるのである。

つづくにのなからはしもつくるなり

いまは我身を何にたとへん

の「つくる」を盡の義とし、長柄といふところから永久常住の連想があり、そこから一轉して盡といふ語が出て來る、といはれたのも卓見であるし、枕草紙の能因と節信の重寶の贈答、能因の長柄の橋の鉤屑から、それが再建されずに亡んだといふ解釋も鑿ち過ぎた嫌ひはあるが面白い。文不破の關を語り、三關整備の動機が壬申の兵亂に在つた事から考へても、また軍防令の規定から

見ても、これらの關が軍事上の必要から置かれ、國防的意義を有つてゐるものであつたことは明かである、勿來の關も本來、東北地方未だ王化に潤はざる勢力の南侵を防ぐのが目的であつて、「なこそ」は實に意味を率直に表明したもの、従つてそれは固有名詞といふよりは、むしろ普通名詞であつたとし、更に不破の關が關料を徵收してゐたといふことに就いて、當時の關は其の本務とする國防以外に、或は自ら其の國防の内に含まれて、人民の移動を禁じてその土着定住を強制し、治安の維持を圖る任務を持つてゐたと説いてゐる點など興味ある所である。(菊判本文二五七頁定價貳圓)(淺子勝二郎)

### Europe, A Geographical Survey of Europe, by J. F. Bogardus. New York, 1934.

歐羅巴地誌に關する著述は非常に多いが、然し全體がよく纏つてゐて、一國々々に就ても細かい地域に分ち、その地域的な敘述を施しながら然かも全體的な考察を輕視せず、現在の政治や經濟の狀態を明確に把握せしめるやうな種類のものとなると比較的少ないやうである。最近筆者が手にしたものの中にも、例へば、A Geography of Europe, by R. Blanchard, translated by R. E. Crist, New York, 1934. & Europe, A Regional Geography, by M. R. Shackleton, London, 1934. などの如き良書があるが、前者は主として自然地理に重きを置いて居り、どちらかと言へば人文現象の方面が輕視され過ぎた嫌がある。殊に或る一國に就て見れば、それを多くの小地域に分ち、殆どその地域的

考察を以て終つてゐて、その國の現在の政治經濟などの狀況が極めて簡略であるが爲に、極めて時代と遠い感なきを得ない。勿論卷末に三十數頁を費して歐羅巴の人口、資源、海外領土、歐羅巴を統一する力、それを分離する力といふやうな綜視的の敘述はあり、そして地誌の基礎的部分をなす地質、地形、氣候などの問題に就ては記述が極めて正確であつて、この點では標準的な地理書であると言へる。然し現状の説明が不充份であるのは聊か物足りなきを感じしめる。また後者はイギリス人の著作であるが爲に、イギリスの部分が全然省略されてゐて、我々にしてみれば極めて不便であり、その形式や内容も前者と同一であつて、一國々々に就て、その全體的な考察が省かれてゐるのが遺憾である。然るに表題に掲げたボガダス氏の「歐羅巴」は、もとよりその形式は普通の歐羅巴地誌と大差あるものではなく、歐羅巴の諸國を北西部、東部、南部に統一し、各國々に就て細かい地域的考察を施しながら、一國全體に就てその人口、天然資源、各方面の産業、交通、貿易などに關し現状の理解に相當努力を傾けてゐる。前二著に缺けた全體的な考察は本書に於てこれを補ふことが出来る。殊に第一編の歐羅巴總説は百七十頁を費して、單に歐羅巴の自然環境のみならず、その人文現象に就ての記述も相當に詳細である。また重要都市の記述に於て、比較的綿密にその歴史的背景を説明してゐるのも本書の特色であるといふべきであつて、それが爲に普通の地理書に比して一段と潤ひがあり深みがあるやうに思はれる。更にまた本書がアメリカ人の手に成れるものであるが故に、特に或る國を省略したり或は特に或る國に就て詳細に過ぎたりす

るやうな缺點がなく、また偏見と思はれるやうな節も別に認められない。只だ更に註文し得ることと言へば、歐羅巴の國際關係に就て、少し總説の記述が詳細であつてほしいとか、一國々々に就てもその國際上に占める位置に關して一應説明が欲しいとか、ドイツやロシアやイタリーの姿がもう少し生き／＼と説明されてほしいといふやうな點があるが、然し大體よく纏つた歐羅巴地誌として推賞出来ると思ふ。因みに著者はペンシルヴァニア大學地理助教授とある。(有賀春雄)

### アリストテレス國家學

(青木巖譯  
第一書房刊)

ニコライ・ハルトマンはアリストテレスとヘーゲルとの相互關係を論じた其の名著の中でアリストテレスの名が顯著なる割合にはアリストテレスの研究が貧弱であることを慨嘆し、『アリストテレスに關しては最も熱心なる者と雖も現今に於ては概要的敘述が含んでゐる傳統的なもの以上には彼に就て殆んど知つてゐない』のが通例であることを指摘し、之は最近のプラトン研究が豊富なるに鑑みて全く驚くべき事柄であると述べてゐる。

我國の哲學界に於て今より十年前『アリストテレス』なる一書をもつて此の偉大な哲學者の生涯及び著書と其の思想體系とに就て忠實な紹介の勞を取られた青木巖氏は此の度、そのアリストテレスの著書にして『古代ギリシヤの殘した最も驚異すべき著作』と言はれたポリテイカ(國家學)を譯出せられた。此の書の重要性は改めて論ずるまでも無いが、最近マキヤヴェリの政治